# H・スペンサー哲学受容の様相

## ――『東洋学芸雑誌』、『六合雑誌』、『中央学術雑誌』を中心に――

槙林滉二

### 一、

明治期、近代日本の思想や文学が、日本の思想や文学として自律するに、幾多もの階梯を登らねばならなかった。明治十五年四月、『東洋学芸雑誌』第七号に載った、金城居士の「思想の獨立」という一文に次のような一節がある。

「業ニ已ニ孔、孟ヲ以テ、理ノ標準トハセサレトモ、ミル、バツクル、スペンサーヲ以テ、議論ノ準繩トナスニ至リ、最多最大ノ幸福ハ、人生ノ目的ナリト、曰クスペンサー之ヲ揚言スレハナリ、國運ノ盛衰ハ、風土寒暖ニ因ルモノナリト、曰クバツクル之ヲ説ケバナリ、男女同權タル可シト、曰クミル之ヲ唱フレハナリ、以爲ク此ノ如クンハ、コレ人類ニ非スシテ鷄鶏ナリ」

すなわち、かつての「決ヲ孔、孟ニ仰クヲ常」として、「孔、孟可ト言ヘハ、卽チ可、否ト言ヘハ、則チ否、一ニ孔、孟ヲ以テ議論ノ規矩」とした儒学中心の時代から、「泰西ノ學一タビ」我国に入って、「思想初テ獨立」するを得たが、しかし、そのまますぐに、「自ラ獨歩スル事能ハスシテ、西哲ノ壓抑ヲ受クルニ至レリ、豈ニ概嘆ノ至リニ非スヤ」と、世の「鷄鶏」の状況を嘆くのである。「嗚呼東洋ニデカルト出テ、言論其光輝ヲ受ケ、以テ孔、孟西哲ノ獄ヲ脱シ、自ラ其意ノ向フ所ニ馳騁スルハコレ、果シテ何レノ日ゾヤ」と金城居士は嘆息する。のち、北村透谷が、「革命にあらず移動なり」(「漫罵」明26・10)と嘲じ、夏目漱石が「外発的」(「現代日本の開化」明44・8)と難じた状況論の先蹤である。

維新後の思想混迷の期、金城居士のいうように、「君臣、父子、夫婦、兄弟、皆其義ヲ守リ、其道ヲ行ヒ、上下貴賤ノ別、自ラ定リ、各其分ニ安シ、社會ノ秩序、自ラ整然トシテ見ル可キモノ」のあった「孔孟ノ學」、すなわち、幕藩体制が持っていた儒学共同体の「規矩」を失った、若き明治日本が、その「理ノ標準」を「西學」に求めたのは、事の次第として当然であったかもしれない。福沢諭吉の「学問のすゝめ」(明5、2～9、11)やスマイルス著、中村正直訳の「西国立志編」(明3、冬～4・7)らの四民平等の論は、確かに、旧体制とそれを支える倫理思想を破壊した。しかし、その代りとなる、体制維持の理筋に乏しく、その論理を求めて、明治初期の思想界は動揺したのである。西欧諸科学に、キリスト教倫理に、フランス共和思想に、それらの途を求めた。そして、その一つに、ハーバード・スペンサーの哲学があったので、スペンサーの時代とでもいう時期が、明治初、中期にあったことは、すでに多くの先学の証されているところである。(1) 進化論を基底とした、「社会

有機体説」や「社会不可知論」などをその中心論におく、広大な学問体系は、有名な「綜合哲学」の中に、その全容が収められているのであるが、日本では、明治十年代中頃より三十年代にかけて、数多くの翻訳書が出版され、その流行は一世を風靡した。「綜合哲学」という、広い眼くばりの所以もあって、彼の論は、保守派からも進歩派からも重用され、清水幾太郎氏などは、スペンサーに内在するそれらを、「二つの魂」として見事に整理されている。(2)

分権を論じた「斯邊撒氏代議政體論」(明10・12、鈴木義宗訳)、国家の干渉について難じた「斯邊撒氏干渉論」(明13・2、鈴木義宗訳)、女子の権利を論じた「女權眞説」(明14・1、井上勤訳)、民権を論じ、当代きってのベストセラーズになった「社會平權論」(明14・5〜17・2、松島剛訳)、そして、スペンサー社会学の原理と方法を論じた「社會學之原理」(明15・4、乗竹孝太郎訳)、「道德之原理」(明16・7、山口松五郎訳)、「政法哲學」(明17・10〜18・12、浜野定四郎・渡邊治共訳)、進化を論じた「萬物進化要論」(明17・4、西村玄道訳)、「宗教進化論」(明19・6、高橋達郎訳)などなど、実に多彩、多岐にわたる。これらの基本論理、日本への流入過程などについては、すでに、下出隼吉、山下重一両氏の精細な論稿がある。(3) 例えば、下出氏は次のように述べる。

「スペンサーは又明治十年頃から盛んにその説が舶來せられ、明治十五六年邊りがその最盛期の様であつた。當時は例の鹿鳴館時代であり、歐化主義の最も甚しかつた時であり、外國書も段々多く讀まれる様になつたときではあるが、殊にスペンサーのもの、其内でも代議政體論やソシャルスタチックスなどは多く讀まれた方で、代議政體論が拾指に近い程翻譯されてゐることから云つても、ソシャルスタチックスの翻譯である尾崎氏の權利提綱が再版になつたり、松島氏譯の社會平權論が非常に廣く讀まれたのから見ても明らかであらうと思ふ。」

「恰も一と頃のマルクスの如くにスペンサーは、明治の始めには非常に我國で持囃されたものであつた。」のである。

山下氏は、「スペンサーの思想形成」として、その「綜合哲学」全体系をまとめられ、松島剛訳『社会平権論』、馬場辰猪、坂本直寛、徳富蘇峰らを「自由民権運動」とのかゝわりで論じ、フェノロサ、加藤弘之、外山正一らを東京大学とのかゝわりで講じ、そして、明治政府とのかゝわりを、森有礼、金子堅太郎らを介して述べられる。まさに、明治政府自身をも含めての、日本全体を包みこむスペンサーの時代があったのである。

そしてそれは、文学の世界にも領導される。その大略を見るなら、三遊亭円朝、坪内逍遥、二葉亭四迷、北村透谷、末広鉄腸、夏目漱石、徳富蘆花、高山樗牛、三宅雪嶺など、実に多彩な文学者達の上に、その影響の跡が見てとれるのである。それらの受けとめ方とて、必ずしも一様でなく、保守から革新、浪漫主義から自然主義まで多岐にわたる。ただしかし、ただ一様に、思想の一基準、「理ノ標準」、「議論ノ準繩」としてそれらを使用したあとがあることは確かに思われる。それらの追求、整理は今後をまたねばならない。ここでは、このスペンサー哲学が、明治初、中期、どのような形で受容されたかを、当時の雑誌によりながら眺めてみたい。すなわち、右のような著名な思想家、文学者などでなく、より広く一般に、当時の雑誌の中で、これらがどのように受容されたか、その反応の様相や状況についてである。ために、当時の雑誌のうち、今は、『東洋

学芸雑誌』、『六合雑誌』、『中央学術雑誌』の三誌により、その状況を眺めることにした。哲学・思想界の反応、キリスト教・宗教界からの反応、文学の世界からの反応の状況把握を期したものである。二十年代に入ると、『哲学界雑誌』、『国民之友』、『日本評論』などが、当時の思潮を表象していったのであるが、それらの追尾は、別稿を考えている。

以下、三誌を中心として、スペンサー哲学受容の概況を眺めてみたい。

## 二、

明治十四年十月発刊、主に東京大学の教授陣を中心に論陣をはった理学啓蒙雑誌『東洋学芸雑誌』[4]、小崎弘道を編輯人として、明治十三年十月発刊された、キリスト教理を中心にした啓蒙総合雑誌『六合雑誌』、同攻会（東京専門学校の同窓会）の機関誌として、後の『早稲田文学』胚胎の基盤を作った、明治十八年三月創刊の『中央学術雑誌』、これらは、スペンサー哲学が、いかに、明治思想界に受容されたかを語る、一つの好材を与える場と思われる。しかし、スペンサー哲学や社会学、進化論を含む論を広範に求めるには、多岐にわたり、時として内容上、誤認を伴う恐れがあるので、今は、スペンサーという人名の使用にのみ依りながら摘出、それらの内実追求をはかった。以下、大きく四つのランクで思量してみたい。一つは、スペンサー哲学の全肯定のもの、二つに、自らの論理や主張に対する援用として使ったもの、三つに、否定もしくは批判を加えたもの、四つに、単純言及もしくは単純列挙のものである。有為性を中心に考えてみたので、その第四のものは、言及をひかえた、細微な量的処理は今は考えていない。

結果として、三誌の受容状況の概観を述べるなら、予測されたことではあるが、全肯定の論理は『東京学芸雑誌』に多く、『六合雑誌』に乏しい、あわせて、『中央学術雑誌』に明治二十年以降、終刊の二十六年まで、急激に言及が消えていることなどが、まず、大きな特徴としてあげられよう。後者については、優勝劣敗、自然淘汰を原則とするスペンサー哲学の論理が、事の流れとして、人為による大きな変革を拒否し、いつか、「自然」の営為をそのまま認定することになり、自然主義文学系の論理構築等へ流入してゆくのではないかという思い―それはすでに中村光夫氏なども指摘されるところである[5]―があり、それらの様相の実態が予見できぬかというのが私の仮想であったが、今の所、『早稲田文学』などの追尋をはかる今後の仕事になりそうである。

概観の二つは、援用論が、右の『中央学術雑誌』二十年以降を除き、三誌とも断絶的に出現し、自らの論理の補強や補填に使われているということである。スペンサー哲学や社会学に同じ考えがあるということが、自らの論理の「規矩」になるのであろうか。そのことは、これらの哲学の浸透の度合いの強さを物語る。あわせて、単純言及、列挙もそれらと類する形で出現する。がしかし、これは、三誌ともにもつ、啓蒙性にもその因があり、西欧諸学の輸入紹介に力がこめられていることから出てくる現象でもあるので、早急な結論はさけねばなるまい。反スペンサー論理が、『六合雑誌』に多出するのも、当然といえば当然であるが、『東洋学芸雑誌』にも散見した。しかし、『中央学術雑誌』に殆んどないのは、前二誌ほどの論及の必要性をもたぬ、同窓誌的な雑誌の性格の故かもしれない。

以下、具体的に見てゆく。『東洋学芸雑誌』にみられる全面肯定の主要なものは、次のようである。明治十五年一月から三月にかけて「論説」欄に発表された「自然淘汰法及ヒ之ヲ人類ニ及ボシテハ如何ヲ論ス」（第四～六号）という一文で、「ダーウキン、スペンサー二氏ヲ初トシ其他進化主義ノ主張者等皆云フ凡テ有機物タルモノハ度學連數ニテ増加スルノ傾向ヲ有セザルモノナシ」と有機物の増殖から述べはじめ、各「有機物」の「増加」の無限なるを語り、それらが、「互ニ競爭スルカ故ニ此世界ハ競爭場トナリ」、それ故、「自然淘汰卽チ適種生存」が生ずると進化の説を重視、そのことを人類社会に及ぼして考えるべきだという。「余ハ將ニ左ノ語ヲ以テ本題ヲ畢ヘントス夫天道ハ俗眼以テ之ヲ窺フ能ハス僅ニニュートン、スペンサル輩ノ人傑出デ、之ヲ看破スルアルノミ」と、スペンサー等を高評して論を終える。さしたる内実のない、単純、素朴な肯定論である。

明治十九年十二月、六十三号には、「獨乙國留學井上哲次郎氏の來翰」として、ドイツ留学中の井上哲次郎からの手紙が載せられる。井上はその中で、「現今歐洲哲學家多しと雖も生の最も推重するもの唯二人ある而已獨のハルトマン英のスペンセル二氏是れなり」と二人の哲学者を賞揚し、「ハルトマン氏の學セリング氏に本ずくと雖も、亦ヘーゲルショッペンハウエル二氏に出入し、輓近進歩せる各科學の結果を網羅蒐集して一種の新哲學を成、其廣く社會に影響を及ぼすこと猶ほスペンセル氏の學元とコント氏に據ると雖もダルウキンヘルムホルツ二氏の説を採り、之を補翼するに各科學の結果を以てし一種の新哲學を成すが如く而してスペンセル氏は不可知的を信じ、ハルトマン氏は不覺的を信じ、共に迦毗羅氏の教に類似するものあるは亦甚だ奇と謂ふべし。」と論じた。森鷗外は、のち、自論にハルトマンを援用していくのに対し、井上は、スペンサー論理に傾倒するのである。井上のスペンサー傾倒のようすは、「歐洲哲學の近況」（明25・5～6、第一一六～一一七号）により詳しい。これは、明治二十五年三月二十一日、「大學通俗講談會」での井上の講演の速記である。井上は、「英吉利ノ哲學ヲ今日代表シテ居ルノハスペンサー」であり、「スペンサーヲ知ツテ居ル人ハ日本人デハ今日夥シウ御坐イマス」と述べ始め、その夥しさ故、「委シイコトハ言フニ及ビマセヌ」がとことわりながら、スペンサー哲学について解説する。「夥シウ」という語などに当時の状況が思われる。内容を摘記するなら、「畢竟スペンサーノ哲學ノ大土臺ニナツテ居ルノハ」、「此世界ヲ現象世界ト眞實體世界」との二つに分けることであり、「眞實體世界ヲ知ルベカラザルモノトシ、現象世界ヲ知ルベキ世界ト名ヅケ」、「知ルベキ世界ガ假相デ知ルベカラサル世界ガ眞相デアル、サウシテ知ルベキ世界ハ相對デ眞實體世界ハ絶對デアリマス」と、いわゆる「不可知」の説を述べ、それは「佛教」と「符合」し、「耶蘇教ノ旨」とは「大層違ヒマス」と次のように講ずる。

「萬有神教ハ萬有盡ク神ナリトノ考ヘデアリマス、然ルニスペンサーノ哲學ハ畢竟萬有神教デアリマスカラ耶蘇教ノヤウナ惟一神教トハ到底調和スル事ハ出來ナイ、」

「耶蘇教ノ神ハ天地ヲ創造シタモノデアルガスペンサーニアリテハ天地ノ創造抔ト云フ事ハ第一分ラヌ事デアル、耶蘇教ノ神ハ意志ヲ持ツテ居リマスガスペンサーノ方デハサウ云フ事ハ無イ、不可知的デハアリマスガ意志ヲ持ツトカ持タナイトカ云フベキモノデ無

イ、其レカラ人間社會ニ神ガ手ヲ出シテ種々ナル助ヲスルトカ賞罰ヲスルトカ云フノハ耶蘇教ノ神ノ事デ不可知的ノ性質デハナイ、其レガ非常ニ耶蘇教トスペンサーノ哲學ト違フ所デアリマス」

彼は、右のように、スペンサー哲学を、キリスト教と截別し仏教に近づける。また、儒教との近似点を求め、「スペンサーノ道德主義ハ自利主義ト利他主義ト兩立シタモノ」で、孔子の「汎愛」とは「誰モ彼レモ均シク愛スルト云フ主義」ではなく、「自分ノ兄弟妻子カラ次第次第ニ外ノ人ニ及ブ、其順序ヲ付ケタ精神」で、これは「スペンサーノ自利利他ヲ調和シタ精神ト太層以寄ッテ居リマス」というのである。

井上は不可知論や、道德主義を重用しながら、スペンサー学と既存の日本の宗教、思想との融合をはかろうとする。そこに、井上の、というより、明治日本の西洋諸学輸入時に試みられた一つの特質が見出される。西洋の思想や思考の根本的な成立過程や論理内容を問題にしないで、論の表層部の類似面を短絡的に照応して、自らの論理を自み立てる、あるいは論証例とする。いわば「上すべり」の文化論である。井上に、その一つの象徴をみる。

全肯定論というより、自論への援用論として扱うべきかもしれないが、右のような論を用いて、井上は更にキリスト教攻撃を続ける。「教育と宗教の衝突」(明26・1～3、第一三六～一三八号)、「教育と宗教の衝突に関する餘論」(明26・4、第一三九号)などがそれである。前者で彼は、国家主義を重視、「耶蘇教」を「無國家主義」と否定、「米の倫理學者は、漸々耶蘇教を離れて別に倫理學を立てんとす、英國のベンタム、ミル、ペイン、スペンサー獨逸のヴンド、キズヂキー、ヂューリング丁麻克のホフヂング米國のワルター、コイト諸氏皆耶蘇教を以て倫理の基礎とせざるなり。」と、自らの論の正当化に西洋の無神論者を用い、後者では、スペンサー説に「服從の害」ありと「耶蘇教徒」は攻撃するが、「少しも服從の元素なければ、社會は決して成立つこと能はず、スペンサー氏も國法に服從し、慣習に逆はず、未だ不敬事件を演せしことあらざるなり」と、暗に内村鑑三事件などを含むキリスト教の反国家主義的な動きを批難、「耶蘇は羅馬に税を納むべしと云ひて服從の意を表は」したこともあるではないかと難ずる。国家主義的な立場に立ってのスペンサー論の援用である。のちの、高山樗牛や三宅雪嶺などの主張へつながる、国家主義的な面からのスペンサー使用がすでに見られるのである。

こういった『東洋学芸雑誌』における、多く井上哲次郎のスペンサー肯定論に対して、『六合雑誌』に全肯定論は乏しい。しかし、その中での、好意的なものをあげてみる。「駁ニ耶蘇教排撃論」(明15・3～4、第二一～二三号)なる「論説」は、米人インガルソールの「神ハ凡テ人民自ラ造ル所ナリ」という「諸神製造」の説(「耶蘇教排撃論」須田辰次郎、津田純一訳)に対し、「宇宙ノ主宰」たる「全知全能永遠無窮ノ靈ナル眞神」を信ずる立場からの反駁文であるが、そこで、スペンサーを使って次のようにいう。

「今此駁論ヲ結フニスペンサル氏ノ説ヲ以テス可シ曰ク『凡テ宗教ニ依テ現出スル所ノ此等ノ異殊ナルモ相關係スル事アル無數ノ現象ヲ偶然ニ起ル者トスルカ或ハ人造ニ出ルトスルモ畢竟維持ス可ラサルノ假説ナリ其證跡ヲ穩當ニ探究セバ或ル人ノ唱ル如キ信仰ハ僧侶ノ創造ニ係ハルトスルノ説ヲ全ク否定スル也』苟シクモ事物ノ理

ヲ深ク探究スルノ學者ハ此等尋常ノ理ヲ認識セザル者ナカルベシ」

スペンサーの不可知の論理を逆用したものである。つまり、「不可知」故、井上などはキリストの全知全能論を否定したが、ここでは不可知故、神人造説を否定するのである。スペンサー論理の包括性の生みだす欠落部がここにありそうであるが、今は指摘にとどめる。

明治十四年五月から翌年四月まで『六合雑誌』に断絶的に「論ニ開化之理ニ」（第八号～二二号）を発表した高橋吾良は、その中の各所にスペンサーの論理を用いる。二、三抜き出してみるなら、次のようである。

「吾ガ邦從來ノ宗教ハ已ニ衰頽シテ再ビ物ノ用ニ立ツベクニアラズ將來日本ノ道德ハ何ヲ以テ之ヲ維持セントスルヤホルベルトスペンソル氏曰ク久シク民心ヲ制御シ居タル德教ガ之ニ代ル可キ適當ノモノ、起ラザルウチニ衰頽亡滅ニ歸スル程大ナル災害ハ天下ニ稀レナリ（スペンソル氏道德論第四章ニ見ユ）ト是レ氏ガ道德學ニ付テ辨論セラレタル語ナリトイヘドモ之ヲ宗教ノ事ニ用ユルトキハ更ニ適切ナルヲ覺ユルナリ、」

「從來の宗教」に代るものとしてのスペンサー援用ではない。その断け目の意味づけにスペンサーの論理を使うのである。

また、「國家」とは、「人ト人トノ集合シテ成セル所ノ一體」であり、「先ヅ政事ヲ談論セント欲スル者ハ必ズ國家ノ成分ナル一人一人ノ上ニ就テ人體ノ法ト人性ノ理トヲ學ブ可シ」と政治を論じて次のように引く。

「スペンサル曰ク『經國ノ政ヲ爲ス所ノ人ハ必ズ多少生命活氣ノ學ニ渉リ又心學ノ理ニ通ゼザル可ラズ』ト君又一時嘆ジテ曰ク『若シ議院ニ於テ心理ニ本イテ論辯スル議員アラバ衆議員ハ必ズ駭イテ之ガ説ヲ退ク可シ』ト深ク思ヒ考フ可キナリ」

社会有機体を説き、そのもとにある個体の有為を説いたスペンサー論の使用である。この有機体が、個々の権の重視に用いられた時、民権論に行き、個々の権が「經國ノ政」にまで拡大した時、個の充足がとりもなおさず国家の経営につらなる国家主義へとゆく。高橋はまだその分岐の所までは論じていない。

「世ニハ道德ノ性ハ人類ニ具ハル者ニ非ズト論ズル者アレドモ是等ノ論者ハ事實ヲ無視シテ論辯スルナレバ其言固ヨリ觀ルニ足ラズスコットランドノ學者カルダルウッド並ニ英人スペンサル等之ヲ論ジテ彼ノ無學者ヲシテ其口ヲ閉シメタリ（カルタルウッドノ道德學、スペンサルノソウシヤル、スタチクスヲ見ヨ）」

「社会静学」を利用した、天賦人権論の説明である。これらを総じて、高橋は、論題のように「開化」が「人間ノ幸福ヲ得ル道」であることを切々と説いてゆく、スペンサー学はその論理を支える骨格となるのである。

明治二十二年四月、「方今思想界の要務」（第一〇〇号）において、大西祝は、「宗教と學術の調和」を論じて、自らは「スペンサー氏の哲學に格別の信用を置く者にあらず」とことわりつつも、次のようにスペンサーを肯定的に引く。

「嘗にロッツェの哲學のみならず通常宗教の仇敵視さるゝスペンサー氏の哲學の如きも亦學術と宗教の調和を爲さんとするものゝ如しスペンサー氏の所謂『不可知的』なるものは此兩者の調和を爲さんとする者に外ならず」

宗教も学術も、「不可知」の認定とその追求において一致するというのである。

『中央学術雑誌』に、全肯定のものは、殆んどない、ただ、東京専門学校の「各科課程表」の中、専修英学科および兼修英学科の本科二級と一級に、スペンサーの「哲學原理」（明18・7、第九号）、英学部課程の二年講義に「スペンサー氏教育論」、三年輪講に「スペンサー氏代議政体論」、四年講義に「スペンサー氏哲學原理」（明19・4、第二六号）がテキストとして使われていることは、当時の空気を如実に伝える。それらの成果と思われるものが、明治十九年七月に、英学科得業生佐竹時之助訳で、スペンサーの「哲學原理」の一部が、「哲學ノ定義」として訳出されている。「人類ノ思議シ得可キモノト思議シ得可カラザルモノトアルヲ説キ、物ノ眞性ハ識ル能ハズ」という、例の「不可知論」の個所である。北村透谷、東京専門学校英語科在学時である。

## 三、

右のような肯定論に対して、自らの論へのスペンサー学援用は様々な形で現われてくるが、ここでは、事の鮮明化のため、スペンサー学否定論もしくは批判論を先にみてみよう。

『東洋学術雑誌』に、正面からのスペンサー攻撃は乏しい。例えば、スペンサー学の直流とみなされる、有賀長雄に、人と人、人と万有との間に存在する「理係」を追求した哲学が現在要求されており、「ベンサム氏の最大幸福論、及びスペンセル氏の社會靜狀論の如きも皆次第に因て起りたる論説なり、」と論じつつ、「ただ、其廣く萬有に對する理係を究めず、遠く未來の人に對する理係を度らさるを惜むのみ。」と難ずる（「社會と個人との關係の變化」明16・4、第十九号）論や、矢田部良吉の「ダルウヰン氏曾て云へる事ありへルベルト、スペンセル氏の著書は甚結構なれども其中の各節をして確乎たらしむるには一節毎に十五年づゝ研究せざるべからずと」いったダーウィン説の引例（「悲憤慷慨の説」明19・3、第五四号）などがあるが、いずれも肯定的批判とでもいえるものでしかない。

対して、『六合雑誌』には批判論が続出する。幾つか抜き出すなら、次のようである。

小崎弘道は、宗教とは、「祖先を禮拜する」ことから始まり、それが進化したものであるとする「スペンセル氏の宗教論」（これをうけた有賀長雄の宗教進化論も含めて）を「皮相」的と批判、「マクスミユラル」らの言を引きつつ、「一神教」の立場を強く主張、スペンセルらが、「教祖の勢力を承認せざる事」に「甚た偏僻なる所」があるとする。進化によるのでなく、「教祖の感化力」によるものを重視するのである。総じて、「經驗論（エムピリシズム）」ではだめで、宗教とは「上帝と人類の關係卽ち人と神の交通」をいうのだと述べる（「宗教の起原」明19・8～10、第六八～七〇号）。これは例えば、第二五号に載った、英國人デニングの演説「靈魂ト肉體ノ緻密ナル關係ヲ論ズ」（明15・7）のスペンセルは「物質ハ思想ヲ生スル」というが、「物質ハ精神ト異ナル」ものであると論じたりしたものと共通のものである。

森田久万人は、学問的に追求、「英、蘇、獨三國ノ學派」は近時進歩したと論じ、「近世歐州哲學家中第一流」の中に、「カント」、「ロツセ」、「ヘーゲル、スペンサ、ハルトマン抔」をあげ、それらに「通曉スルコト」を望み、あわせて、「スペンサ氏哲學批評ニハ『バウヲン』氏『スペンサ』氏哲學及第一主義攻究（又は哲學（メタフィジック））傍ラ『マツコシ』直覚論、『ポルタ』氏人智論『ハミルトン』氏心理

學（メタフキジク）『ポルタ』氏論理學、『ホブキンス』氏愛之則（ラフオフロウ）等ヲ讀ムベシ」と、その批判論を紹介している（「哲學ノ目的及範圍附哲學之窠類」明20・3、第七五号）。また、岸本能武夫は、「有神略説」の中で、「有神説」を、「神ハ万有ナリ天地ハ神ナリ」とする「凡神教」、スペンセルを代表とする「不可識論」による有神論、天啓教を排斥するも神の存在を述べる「自然神學」の有神論、そして、「神ヲ信シ又天啓教ヲ信スル通常ノ有神説」に分け論じているが、うち、「スペンセル」は、神の存在の「端緒原因」を「根據實在」においた、しかし、スペンセルはそれを証明したことはない、つまり、「不定不整純一ナル實在ヲ以テ万有ノ端緒原因」であり、進化論は変遷を述べるが、「其純一ノ實在トハ果シテ如何ナルモノナリヤ」を「明解シタル事」なしとスペンサー批判を行っている（明20・5、第七七号）。植村正久は、「コントミルスペンセル」の諸氏は「衆を利し民を益するの結果を生するを德義の本色」とするのはいいが、「一己の私德を養ひ屋漏にも愧ぢず」というような「操行を維持」することだけではだめで、それらは、「外面の德義と其の結果を貴ふを知れとも」、「心術目的の如何を貴ふことを知らざるに似たり」と難じ、神の存在を論ずる（「果して神に事ふ可らす焉んぞ人に事へんや」明20・7、第七九号）。

いずれも、神の存在を基盤とした、スペンサー批判である。ついで、明治二十年八月、小崎弘道は「有神哲學」（第八〇号）の中で、「スペンセル氏」も近頃は「神ヲ信ズル傾キデアリマス」と自陣に入れようとしながら、しかしすぐに、「スペンセルハ此世界ノ初メハ悉ク平均シタモノガアツテ其モノガ段々變化シテ世界ノ様ナモノガ出テ來タト云フ」、あるいは、「神ト云ヘバ人間ト同ジ様ノ働キヲスル」と思って、その働きを「大工論（カルペンタルシオリ）」というが、神は、そういう「外部カラ働クモノデナイ」ので、「神ガ物ヲ造ルノハ内部ノ働キ」によるもので、「人間ガ物ヲ造ル」のと大いに違うと批判を加える。同じく小崎は、二十一年六月には、「進化哲學なるスペンセルの不可思議論」も、一時は盛んだったが、「深遠なる思想ある者は之れに安んずる」ことがなくなってしまったと、「スペンサー」の時代が終ったことを主張するのである（「ユニテリヤンの宣教師ナップ氏の演説筆記を讀む」第九〇号）。

個の自立と内部の追求を重んずるところで、森村と小崎は似かよう。進化論という科学を中心としたスペンサー論理に内在する問題がここにあったのであろう。

当然ではあろうが、『六合雜誌』上のスペンサー批判の中心は、右のように、神の実在論を中心に論じられ、多くはスペンサーの「不可知論」での妥協を拒否しているのである。ただ、つけ加えておきたいことは、こういう、小崎らのような、やゝ独善的な圧えつけに対して、金森通倫が、近頃、宗教界は、「ユニテリヤン流」や「独逸流の批判的神學説」を「毒虫でも入込んだる如く」に扱い、「ミル、スペンサーの説は聞くべからず」と考えるような、一方的な鎖国主義におち入っていると自己批判を行い（「宗教社界の鎖國主義」明23・10、第一一八号）、横井時雄が、「社會學」の必要を認め、「基督教會の反對家たるアダムスミス、ベンサム、ミル、スペンサに先鞭を着けられたるこそ遺憾の至極なれ」、むしろ、「神學界」がこれをやるべきであった（「本邦に於ける基督教前途の眺望」明25・3、第一三五号）と述べるなどの反省、自己批判がでているのである。また、浮田和民は、「スペンセル氏の哲學は唯物的凡

神教と言ふ可き」であり、「不可思議を以て世界の大元となし」ているので、その「原因結果の理法」は、「基督教の有神哲學」と矛盾するところなしと論じ（「凡神教を論ず」明22・6、第一〇二号）、帝坡学人の「有神説、不可思議説及万有神説」（明26・4、第一四八号）も、「スペンサー氏の所説」は、「有限の事物」を認めているので、「不可思議説は、全然有神説に反対するにあらず神てふ思想を人智以外に逐はんと欲するものなり」と述べていることなどは、それらをより進めたものであろう。『中央学術雑誌』に、強い批判論はなく、わずかに、西洋天狗が「宗教論」（明18・6～8、第八～一三号）で、「靈魂」の存在説を述べ、「スペンサル氏」は「心裡ノ現象ハ頭脳物質的ノ勢力ニ因ラサル可ラズ」として、「心理」と「生理」の連動をはかるが、これは「僻論」であると断言、「ダルウキン、スペンサルノ奴」は、「現今ノ世界ハ完全ノモノニ非ス故ニ之ヲ創造シタル天帝モ亦完全無欠ノモノニ非ス決シテ全知ト云フ可ラス」として、「天帝」の存在を疑うが、「天帝始メテ人ヲ造ルニ當リ之ニ與フルニ自由意志（フリーワキル）ヲ以テス」ということで、その「自由意志」で人々は、善悪をえらぶ、そこに「社會進歩」があるので、「進化説ノ行ハル、天帝ノ全知全能タルニ害ナシ」と天帝存在を強調、「ミル、スペンサ、ベックル、ヘーゲル」などは、「博識」だが、「宇宙ノ原理ヲ論スルニ至ツテハ未タ乳臭兒タルヲ免レス」と大言する論などが目立つ位である。もとよりここに、さしたる論理はない。

こういった肯定、否定の間に、様々なる援用論や、単純言及の論が存在するので、状況論としては、それらの整序が重要であろうがすでに紙幅はつきた、後稿にゆだねたい。ただ、ここまでの、肯・否定論を中心にしつつまとめておくなら、スペンサー哲学に依拠した論理の動きは二つの問題を潜めていたことが如実になってくる。一つは、社会有機体論理が分岐する二つの傾向、有機体の組成の個々を重視しての民権論、全体を重視しての国権論へゆく含みが、ここでも明らかに見られることで、明治の社会を支える論理として、両派に使われた姿が、高橋吾良や井上哲次郎の姿勢などにあらわになる。今一つの傾向は、「不可知論」の影響で、この論理の故に、単純な進化説よりも、スペンサー論が宗教界に思想界に入れられる要素が多くなったということで、すなわち、世界のすべてが説き明かせるといった単純な科学信仰に対して、不可知の領域をおくことで、そこに、宗教や美学が入りこむ要因を作ったのである。スペンサー理論が、文学論や宗教論として援用される一因がここにあり、『六合雑誌』などにおける宗教界からの言及の多くも、この点に集中し、肯・否両面に分れるのである。しかし、こういった受容状況の総括は、前述したように、『哲学会雑誌』、『国民之友』、『日本評論』その他の同時代誌の追求を併せて考えてゆかねばならない。

注（1）下出隼吉『下出隼吉遺稿』（昭7・4）、永井道雄『近代化と教育』（昭44・11、東大出版会）、山下重一『スペンサーと日本近代』（昭58・12、御茶の水書房）など参照。

（2）清水幾太郎「日本社會學の成立に就いて」（昭8・11～12『思想』）参照。

（3）注（1）参照。

（4）渡辺正雄『日本人と近代科学—西洋への対応と課題—』（昭51・1、岩波書店）、深宣和男『明治の国文学雑誌』（昭53・2、笠間書院）参照。

（5）中村光夫「日本の近代文学と文学者㉑—進化論の影響—」（昭52・2『朝日ジャーナル』）

——佐賀大学教育学部教授——